博士学位論文審査要旨

２０１４年1月１３日

論 文 題 目：１９７０年代の「アイドル」文化装置としての雑誌『明星』
学位申請者: 田島　悠来
審 査 委 員：
　主　査：　社会学研究科　教授　佐伯　　順子
　副　査：　社会学研究科　教授　竹内　　長武
　副　査：　宮崎公立大学人文学部　准教授　阪本　　博志

要　　旨：

本論文は、日本における「アイドル」という存在の社会的な意味を、集英社発行の雑誌『明星』（現 Myojo）の 1970 年代の記事分析により、明らかにしたものである。

分析対象を 1970 年代に絞ったのは、この時期がテレビ番組『スター誕生』（日本テレビ系列、1971 年放送開始）を筆頭として、テレビメディアの音楽番組からスターが輩出され、日本の芸能界における「アイドル」の萌芽期とみなされること、同時に、雑誌『明星』もこの時期、「アイドル」に焦点をあてた誌面づくりで人気を博し、発行部数も 100 万部を超え、この雑誌の全盛期とみなされるからであり、「アイドル」の雑誌記事における表象と受容の様相を明らかにするために、最適な時期であると判断したからである。

論文は全六章および結論で構成されている。まず第一章と第二章においては、1970 年代の『明星』が、「アイドル」の情報を伝える雑誌媒体の代表的な存在であったことを、『明星』の歴史および同時代の社会的背景とともに論証し、『明星』を「アイドル」を読み解く「文化装置」として位置づける。第三章以降では具体的な記事分析と当時の編集者へのインタビューを通じて、『明星』誌面における「アイドル」のイメージとその特徴、および編集側の意図を明らかにしている。

表紙に登場するアイドルの登場回数のランキングやファッション、記事本文の内容を詳細に検討し、あわせて編集側の意識を明らかにすることにより、本論文は、1970 年代の「アイドル」が、ジーンズに象徴される若者文化、当時の表現でいう「ヤング」の代表的な存在として位置づけられていたこと、また、親を伴う海外旅行や帰省を報じる記事を通じて、「親孝行」という日本社会の美徳の体現者として表象されたこと、さらに読者投稿ページにおいて、身近な学校生活を共有する同世代の「擬似的仲間」として読者から受け止められていたことを明らかにした。

上記の結論により本論文は、日本社会における「アイドル」という存在が、単なる芸能界のスターという意味をこえ、1970 年代の若者世代の自己表現の手段や、日本社会の倫理・道徳観を体現する存在としての、幅広い社会的機能を有していたことを証明した。

「アイドル」研究を芸能史研究の枠組みにとどめることなく、雑誌記事の詳細な実証的分析にもとづいて、その社会的機能を明らかにした本論文は、メディア学における雑誌研究の新たな可能性を開拓する意味でも、また、日本社会論、特に若者論や世代論としても、重要な意義をもつものとして評価できる。

よって本論文は、博士（メディア学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認めることができる。

総合試験結果の要旨

２０１４年1月１３日

論 文 題 目：１９７０年代の「アイドル」文化装置としての雑誌『明星』
学位申請者: 田島　悠来
審 査 委 員：
　主　査：　社会学研究科　教授　佐伯　　順子
　副　査：　社会学研究科　教授　竹内　　長武
　副　査：　宮崎公立大学人文学部　准教授　阪本　　博志

要　　旨：
　上記審査者三名は、2014 年 1 月 13 日（月）の公開学術講演会にあわせて、同日午後 5 時 30 分から 6 時 30 分まで、渓水館 1 階メディア学資料室にて、口頭試問を行った。この試問において、学位申請者がメディア学、雑誌研究、文化研究、ポピュラー音楽研究といった関連分野において、博学な知識と深い理解をもっていることが示され、また、語学試験（英語）についても、専門分野に関連する十分な語学力を有していることが確認された。以上により本学位申請者の総合試験の結果は合格と認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 1970年代の「アイドル」文化装置としての雑誌『明星』
氏　　名： 田島　悠来

要　　旨：

本研究は、日本における「アイドル」という存在のメディアでの萌芽時期であるとともに、集英社が刊行している雑誌『明星』（現 Myojo）の最盛期にあたり多くの青少年読者を抱えたと目される1970年代（以下70年代）の誌面において、「アイドル」がどのように表象され、受容されていたのかを探った。

日本社会における70年代は、高度経済成長を経て戦後の近代化が成し遂げられていく途上にあり、同時に、73年のオイルショック以降それが徐々に変質していく過渡期として位置づけられる。これと時を同じくして、「アイドル」は、70年代初頭に『スター誕生！』（日本テレビ系列、1971年放送開始）を筆頭としたテレビメディアの音楽番組から生み出され始めたと言われているが、1952（昭和27）年8月に集英社から発刊した雑誌『明星』は、「アイドル」に焦点を当てた誌面作りで人気を博し、特に72年以降、発行部数常時100万部を超え、競合誌であった『平凡』（平凡出版、1945年創刊）をも凌駕する雑誌へと成長していった。

70年代の『明星』読書状況を毎日新聞社が実施している『読書世論調査』から紐解くと、この時期の『明星』は、「ふだん読んでいる雑誌」として中高生男女共に上位に挙げられ、70年代の10年間を通して小学生にまで波及していっており、貸し借りを合わせると発行部数を超える数の学校に通う青少年に読まれている雑誌であったと言える。

このように70年代の『明星』が多数の若年層の心を魅了し「黄金の時代」を迎えた所以は、『明星』という雑誌が、テレビから大量に輩出されてきた「アイドル」の情報を「テレビと相補いあう」（阪本博志）形で伝達することを通して「アイドル」の‘等身大性’を描き出し、「アイドル」に現れた「平準化された大衆社会（富永健一）」を的確に捉えていたからであるのではないかと考えられてきた。つまり、70年代の『明星』は、「アイドル」がどのように描き出され、いかにして読者の心を掴んでいったのかを究明するという意味から、また、70年代という時代の若者の在り方を「アイドル」という存在とそれを受容する青少年読者を軸に捉え直すという意味からも格好の媒体であると見られる。しかし、これまで『明星』について言及した研究は少なく、誌面分析は行われておらず、充分な議論がなされてきたとは言い難いのが現状である。

そこで本論文では、70年代の『明星』に焦点を絞り、『明星』を「アイドル」を読み解く「文化装置」（ミルズ）として位置づけて論じていくが、その際には読者側に主体性が見込めるのではないかという立場（石田佐恵子）をとっていく。

具体的には、まず第二章において70年代の日本社会、主に高度成長と関わった団塊の世代とその下のポスト団塊の世代の若年層の動向および若者向けジャンルとしてのテレビや雑誌といったメディア状況を整理するとともに、同時期の『明星』の概観を見ていく。

次に第三章・第四章では、言説分析を用いて、『明星』にとってターニングポイントして考えることができる1971（昭和46）年9月号から79（昭和54）年12月号までの期間の『明星』誌面記事の分析を施す。第三章では、カラーグラビアページにおいて「アイドル」がどのように表象されているのか、第四章では、読者との交流を意図したページである読者ページにおける読者交流および読者投書の内容から読者側が「アイドル」を受容するプロセスを追っていく。

第五章では、第三章・第四章で導かれた事柄は、『明星』の作り手側のどのような意図によるものであると言えるのかを明らかにしていくために、70年代に『明星』の編集に携わっていた

代表的な編集者に対して筆者が実施したインタビューから編集者の声に耳を傾けた。また、全盛期の『明星』を支えたと考えられる写真家の篠山紀信と『明星』との関係性にも着目した。

続く第六章では、70年代との比較として80年代から2013（平成25）年8月号現在までの『明星/Myojo』と、80年代に創刊が相次いだ後続の「アイドル誌」に焦点を当て、「アイドル誌」および「アイドル」と読者との関わり方の変化を辿った。

以上の結果得られた知見は次の通りである。第一に、分析対象とした70年代の『明星』カラーグラビアページにおいては、「アイドル」が大別して①学校に通う生徒として②家族の中の子ども、さらには、良き息子・娘としてという二つの側面から描き出されていることがわかった。①の点については、74年に男女全体として高等学校進学率が90%を上回ったことをはじめ、60年代後半から70年代前半にかけてほとんどの者が後期中等教育以上を受けるようになってきたという社会的な状況と連動することであるが、『明星』の記事では、学校生活において抱える問題や悩みを吐露する言説を作り上げることにより、また、制服に身を包んだ姿や学校を連想させる図像が盛り込まれ、学校名やその所在地などの詳細な情報を掲載することにより、「アイドル」がこの時期の若年層の身に降りかかった生活様態の変化を体現する存在として表出していたと言える。「アイドル」が仕事との両立に奮闘しながらも学問に励む姿は、読者に年齢的にも心的にも近しいものであると認識させ、「疑似的仲間」（小川博司）という同世代的な感覚を増幅させることに寄与していたと考えられる。

②の点については、海外取材記事や歌手としての巡業に伴う地方取材記事、自宅・自室公開記事を通じて、親を想い家族のために身を立て、衣錦還郷を果たす「アイドル」の立身出世主義的な親孝行言説が度々登場していたが、これは、高度成長期の都市化によって若者の生活空間が「家」や地域社会から切り離されていく只中にあっては、すでに失われつつあるものを視覚化しているものであったと見られる。つまり、こうした「アイドル」は、同世代的であるというよりも旧世代的な若者の在り方を提示するものであると言えよう。そして同時に、70年代の社会にある過渡的な側面が浮かび上がっている。

第二に、読者ページは、読者と「アイドル」との交流（これを読者－「アイドル」交流型とした）、読者と編集者、読者同士の交流（読者－編集者・読者交流型とした）という読者・編集者・「アイドル」の双方向なコミュニケーションの場として機能していた。その場所において読者は、「アイドル」との直接的・間接的なやりとりにより、同じ生活空間の中に「アイドル」を見出すことが可能となり、‘疑似的’を超えた現実的な意味での仲間として「アイドル」を受容していくことができた。また、読者は投書によって「アイドル」にかかる議論を繰り返し展開し、何が「アイドル」であるのか、何が「本当のファンであるのか」という意見表明と交換を行っていた。加えて、読者たちは「アイドル」についての話題のみならず、自身の生活に関する投書を投書コーナーに寄せており、70年代も終盤になると、読者同士で「わたしたち＝ヤング」という言説を共有していた。

以上から言えることは、70年代の『明星』読者ページおいては、読者が主体的に関わった(1)「アイドル/ファン」解釈共同体(2)＜ヤング＞共同体という二つの読者共同体（シャルチェ）が形成されていたということである。しかしこれらは、必ずしも読者たちによってのみ自発的に生まれてきたものではなく、特に＜ヤング＞共同体が生まれてくる背景には、「明星アニキ」という編集者の存在の大きさが指摘できる。また、『明星』において「アイドル」が表象され、解釈されていく過程には、読者や編集者だけではなく、篠山紀信や当事者である「アイドル」自身、「アイドル」が所属する芸能プロダクションやテレビ局の音楽番組制作者、ライバル誌である『平凡』編集者、そして、『明星』撮影先の地域住民に至るまで多くの関係者が携わっており、70年代の『明星』という「アイドル」文化装置は、これらの人々の相互作用として機能していたと見る方が妥当である。

第三に、70年代という文脈の中に『明星』を位置づけていくならば、『明星』は、カラーテレ

ビが一般家庭へ普及するとともに若者へ向けたテレビの音楽番組が隆盛し、そこから「アイドル」が生まれてくる時期に、「アイドル」とそれを受容する側とを結び付け、「アイドル/ファン」の意味づけを行うという「テレビを補う」以上のテレビメディアとは別の役割を担った雑誌であったと捉えることができる。また、60 年代中盤以降読者のジェンダーによって分離した若者向けクラスマガジンが相次いで刊行されていき、80 年代に「アイドル誌」もこれに従っていく中で、70 年代の『明星』は、男女双方の多くの若年層読者を抱えジェンダーを超えた大衆（マス）雑誌としてあった最後の「大衆アイドル誌」であったと考えられる。そして、「アイドル」との交流やその解釈を巡り積極的な態度を示す読者の在り方や、家族や地域社会とのつながりを強固にしている「アイドル」の在り方は、‘ポスト’団塊の世代として団塊の世代と比較して「シラケている」と見なされてきた若者とも、都市部の消費社会の中に身を投じている若者とも異なる若者像を提示していると考えられ、これまでの若者論が見逃してきた過渡期にあたる 70 年代の若者たちの姿を『明星』は映し出していた雑誌メディアであったと言える。